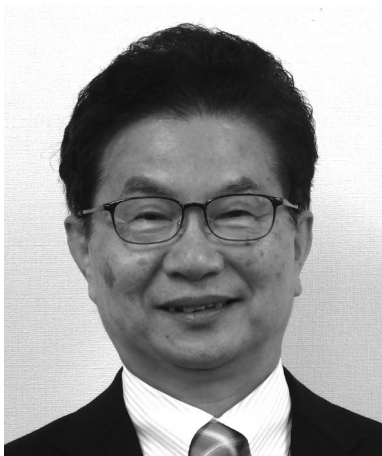

(令和5年6月24日掲載)

差別の現実 どこにある？



奥田 均 (おくだ・ひとし)

近畿大学名誉教授。関西大学文学部教育学科卒業。関西外国語大学助教授、近畿大学人権問題研究所教授などを経て、2021年4月より近畿大学名誉教授。博士（社会学）。現在、差別の法規制問題に取り組んでいる。著書に『差別のカラクリ』『見なされる差別』『「人権の世間」をつくる』『部落差別解消推進法を学ぶ』など（いずれも解放出版社）。

差別の現実には「被差別の現実」と「加差別の現実」の両面から成り立っている。そんな当たり前のことを学生たちに教えられたことがある。

大学教員になって間もないころのことである。「人権論」の講義で「部落差別の現実は今」というテーマで、部落の当事者のつらかった体験談や厳しい生活実態の調査結果を地元大阪の資料で伝えた。ところが受講生の反応はいま一つ。「未知との遭遇」のような雰囲気漂い、中には、「先生、大阪って大変ですね。まだそんな部落差別があって…」との感想を漏らす学生さえいた。

他県の資料を用いて講義を進めても反応は変わらず、私は苦肉の策として「部落差別の現実についてレポートを作成してくるよう」という課題を投げ返した。作成方法がわからないという学生には、「友人や家族など自分の周囲の人と一度ゆっくり部落問題について話をし、その内容、自分の感想を書いてみる」ように提案した。

ある受講生は、レポート作成のために大学近くの喫茶店で友人に部落問題について話を聞こうとしたという。ところが話し始めたところに友人が急に声を静めて「お前、こんなところでそんな話するなよ。間違われたらどうするんや」と話を抑えにかかった。

その友人が言うには、喫茶店というような公衆の場で「同和」とか「部落」という言葉を出して話していると自分たちも部落出身者だと見なされるかもしれない。そんなことになったら大変だからというのである。

「先生、これって部落差別の現実ですよ。部落問題って喫茶店で普通に話題に上らせることすら避けた方がよいという取り扱いをされていること自体、差別ですよ」と書いてきた。

また別の学生は母親と部落問題について話をしようとしたとき、「そんな問題には深く関わらないように」ときつくくぎを刺されたという。レポートには、「部落問題に関心を持つなどという母の態度、これって差別の現実ですよ」とつづられていた。

同様の多くのレポートを見て、ハッと気づかされた。私は「部落差別の現実」を部落の人々が被っている「被差別の現実」にだけ焦点をあてて伝えようとしていたのだった。おそらくそれが受講生たちには自分とは別世界のリアリティーを欠くものとして映ったのだろう。

これに対して、受講生たちが発見してきた部落差別の現実には、例えば喫茶店での友人の対応や家での母親の反応など、「部落の外」での「部落出身者が登場していない」部落差別の現実だった。さしずめそれは部落差別の「加差別の現実」と言えよう。

「加差別の現実」の発見と自覚は、「女性差別の現実」が男性の日常生活の中にあり、「障害者差別の現実」が健常者中心の日々の営みの中にあることにも気づかせてくれる。差別の現実には私たちがごくありふれた日常の中に潜んでいる。差別問題の解決とはこの「被差別・加差別両面の現実」の解消であることがそこからは見えてくる。差別の現実に関係のない人などいない。